うな存在となった。

自著『自画像』によると、助教授就任のとき工芸の教官に「自分がやりたいと思うことを遠慮なく実行してもらいたい。この学校には、科の教育方針というようなものはないから、何でも好きなように、生徒がよくなることをどしどしやってもらいたい」と言われた。当時は先生が生徒の作品に直接手を加えて直すことが教育だと思われていたが、豊周はそれをせず、生徒が花瓶の図案を描くと構成の理屈を説明し、基本になる考え方を教えた。生徒には「この学校は、技術者でなく作家になることを教える所だ。その見当を間違えては駄目だ。自ら勉強の仕方も違う。美術作家はもっと欲望をもって貪欲に何でも知ろうとしなければいけない。世間には、学校で教えてくれないものが一杯ある。生きた社会を生きた目で見ることを覚えなくてはいけない」と話した。「見る」と「読む」と「聞く」が大事で、それ以外に文学が必要だとした。この頃、香取秀真が生徒に「ただ工場へ行って仕事をして、鋳金が出来ただけでは駄目だ。自分で詠まないまでも、万葉集から古今、新古今ぐらいずっと読むだけの興味と理解がないような奴には仕事がうまくいかない」と詩情、詩精神の必要性を説いたが、豊周はこれに共感し、広く「文学」という言葉を使った。豊周は「文学、音楽、劇、活動写真などは遊びのようだが、自然に養われていく情操が自分の制作の根本になる。活動写真は生活に直接関係のある工芸を作るのに非常に参考になる」と話し、こんなことを言う先生は少なかったから、生徒は喜んだ。金工科の生徒は卒業制作の図案でも、みな豊周に見て貰ったという。また、校友会では映画部長を務めた。

⑤ 田中豊蔵の起用

大正十五年四月、田中豊蔵が講師（中央亜細亜美術史授業担当）を嘱託された。田中は明治十四年京都市に生まれ、同四十一年東京帝国大学文科大学文学科（支那文学専攻）を卒業。同四十五年六月以降大正十年三月まで『国華』の編集に従事し、また、大正九年二月以降は文部省の古社寺保存計画調査嘱託を、同十年四月以降は慶応義塾大学文学部講師（東洋美術史講義担当）をつとめていた。

⑥ 正木直彦校長の勲章受領

大正十五年十一月、正木直彦はベルギー国王より勲章 Grand Officier de l'Ordre de Leopold Ⅱ を贈された。叙勲の理由は次の文書のとおりである。

叙勲セラレタル理由書

今般小官儀白耳義國ヨリ「グラン、オフキシエー、ド、ロルドル、ド、レオポール二世」勲章ヲ下賜セラレ候處右ハ曩ニ同國ルーヴァン大學並ニ同大學図書館復興ノ計畫實行ニ際シ小官モ其委員ノ一人タルコトヲ嘱託セラレ同図書館ノ為ニ図書ノ蒐集ヲ謀リ聊カ微力ヲ致シ斡旋スル所有之候ヲ以テ恐クハ其勞ヲ認メラレ叙勲相成リタルモノト思料致候也

大正十五年十一月十二日

東京美術学校長　従三位勲二等　正木直彦

（「大正十五年職員関係書類庶務掛」）